

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 青葉 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

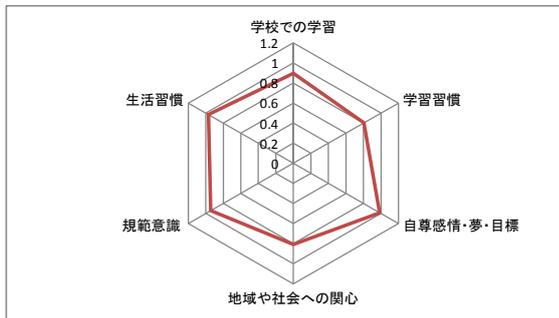
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率								
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均値をやや上回っている。書く能力においては、主述を捉えて正しく文を書くことができている。 ・読む力を問う問題に課題があり、目的に応じて必要な情報を捉えながら文章を読む習慣をつける必要がある。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	・漢字を正しく書いたり、主述に即して文を正しく書く問題についての正答率は高かった。	
	努力が必要な問題	・目的に応じて必要な情報を捉えながら読む問題、相手や場面に応じて適切に敬語を使う問題については、正答率が低かった。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均をやや下回っている。記述式の問題はやや下回る結果であったが、無解答率は低い傾向であった。 ・話す・聞く能力に関わる問題に課題が見られ、相手の質問の意図を捉えて聞いたり、話し合いの場で状況に応じて適切に考えたりする習慣をつける必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よってきた問題	・目的に応じて、文章全体の構成の効果を考える問題の正答率は全国平均を上回った。	
	努力が必要な問題	・計画的に話し合うために、司会の役割について考える問題の正答率は低かった。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均を上回っている。数量や図形についての技能を問う問題の正答率が高く、その中でも分度器を使って180度以上の角度を読み取る問題の正答率が特に高かった。 ・円の直径から円周の長さを求める問題の正答率がやや低かった。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	・180度以上の角度や百分率を求める問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	・単位量当たりを問う問題の正答率が全国平均を下回っていた。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均を上回っている。数と計算、数量関係の問題の正答率が高い。量と測定、図形の正答率は全国平均と同等程度であった。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	・示された考えを解釈し、考察した数量の関係を分配法則を用いて記述する問題の正答率が特に高かった。	
	努力が必要な問題	・メモの情報とグラフを関連付けて、総数や変化への着目点などを解釈し記述する問題の正答率が低かった。2つ以上のグラフを読み取り、その傾向に関して記述を考えて書く学習を積み重ねる必要がある。	
理科	全体的な傾向や特徴など	・全国平均を上回っている。科学的な思考・表現を問う問題の正答率が、全体を通して高い傾向が見られる。 ・電気に関わる問題で特に正答率が高くなる傾向が多い。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よってきた問題	・回路を流れる電流について、その向きや大きさを問う問題の正答率が特に高い傾向にある。	
	努力が必要な問題	・ものの溶け方における質量保存に関する問題の正答率が低い傾向にあった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<p>○学習習慣について</p> <p>・「家で、自分で計画を立てて学習をしている」においては、昨年度同様全国平均を下回っている。また、「学校の授業以外に、1日当たり1時間勉強している」に関して、全国平均値を下回っている。学年に応じた家庭学習習慣の確立のために「家庭学習の手引き」を全家庭に配布し、保護者の家庭学習に対する意識の改善を図っている。年々家庭学習に対する意識が高まりつつある。</p> <p>○学校での学習について</p> <p>・「話し合う活動で考えを深めたり、広げたりしている」に関しては、校内で授業改善に関する研修を日々行っている成果もあり、昨年度より5ポイント上昇し、全国平均値に近い数値となっている。</p>

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

- 学力向上に関する職員会議の定期的な実施
 - ・正答率が低かった学調の問題を解き、児童の実態を把握し具体的な指導方法を話し合う。(全職員・・・実施済み)
 - ・学力定着サポートシステム活用に関する研修。(全職員・・・実施済み)
 - ・自学ノートの取組に関する話し合いを行い、児童の実態に応じた効果的な自学の実施。(全職員・・・実施中)
- 日々の授業改善に関わる研修の実施
 - ・主体的、対話的で深い学びになる授業づくりに関する研修。(全職員・・・主題研究授業及び協議会時)
 - ・若年リーダーを主体とした、授業づくりを中心とした若年研修。(若年リーダー、若年教員、学力向上推進教員・・・実施中)
- 補充学習の継続
 - ・週2回の「補充時間」を月、木曜日に全学級で実施する。3～6年生は主に「学力定着サポートシステム」を活用。(学級担任・・・実施中)
 - ・5年生の希望者に週2回の「放課後ひまわり学習塾」を火、金曜日の放課後に実施する。(ひまわり学習塾指導員・職員・・・実施中)
- 音読暗唱ブック「ひまわり」の活用
 - ・校内「暗唱発表会」を年2回実施し、子どもの意欲を高めると共に国語(古典)への興味をもたせる。(全職員・・・2学期末)
- 国語の「読む力」を高める取組
 - ・文章の要旨、要点を読み取り、文章に書く問題の実施。(中・高学年担任・・・2学期～)
 - ・国語や道徳の時間など、文章を読み、課題に応じて自分の考えを書く授業の充実。(学級担任・教務主任)

② 家庭生活習慣等に関する取組

- 宿題のスタンダード化
 - ・全学年で、自主学習を推進する。各学級で自学ノート紹介を行う。(全校)
 - ・全学年に「家庭学習の約束(1年生～6年生)」を配布し、保護者の家庭学習に対する意識を高める。
 - 1、2年生・・・30分以上 3年生・・・40分以上 4年生・・・50分以上 5、6年生・・・1時間以上という基準を提示
 - 各学年ごとに家庭学習の約束を配布し、「心構え、家庭学習のポイント、身に付けたい力、具体的な取組例」を周知する。(全校)
 - ・「家庭学習チャレンジハンドブック(ダイジェスト版)」を活用する。(各学年)
 - ・漢字・計算等の宿題を出し、基礎的・基本的な内容の定着を図る。(各学年)
- 長期休業期間中の宿題の学校統一
 - ・夏休みは、B4両面30枚(表:国語、裏:算数)程度。(全校)
 - ・冬、春休みは、B4両面10枚(表:国語、裏:算数)程度。(全校)
 - ・採点は保護者が行い、子どもの学力状況を把握してもらう。
- 全国学力・学習状況調査の課題と取組等を保護者へ周知
 - ・学校便り、学校HP、学年・学級通信等で、児童の学習状況等を発信する。(校長・教頭・教務主任・各担任)